

吉小坂かをり『願望百っ景』（新風社、二〇〇五年）



黒いページに、手書きの白い文字で記されたのは、秘めやかな百の願望。そこに添えられた絵の中では、特性を欠いた黒衣の女が、表情も無く孤独なダンスを踊り、あるいはパントマイムを演じている。構成としては実にシンプルだが、この言葉と絵の取り合わせが何とも絶妙で、妖しい魅力を放

つ一冊になっている。「秘密の抜け穴を見つきたい」「捨てられたい」など、記された願望の多くは、どこかねじれていたりが、自棄的であったりするが、時おり、こちらがドキッとさせられるほどにストレートで切実な思いが顔を覗かせもする。このバランス感覚は、かなり稀有なものだと思う。技法も時代も異なるが、絵そのものの感触としては、内田百閒の挿絵画家としても知られる谷中安規の作品に、どこか通じるものがある。ブザマでもあり、愛おしくもある人間の裸の姿を、毒とユーモアを込めてさらりと描いてしまう、そんな才能が共通しているのかもしれない。とにかく、今後の作品が楽しみな作家だ。（堀）